

# 埼玉古墳群出現当時の地理的景観について

杉崎茂樹

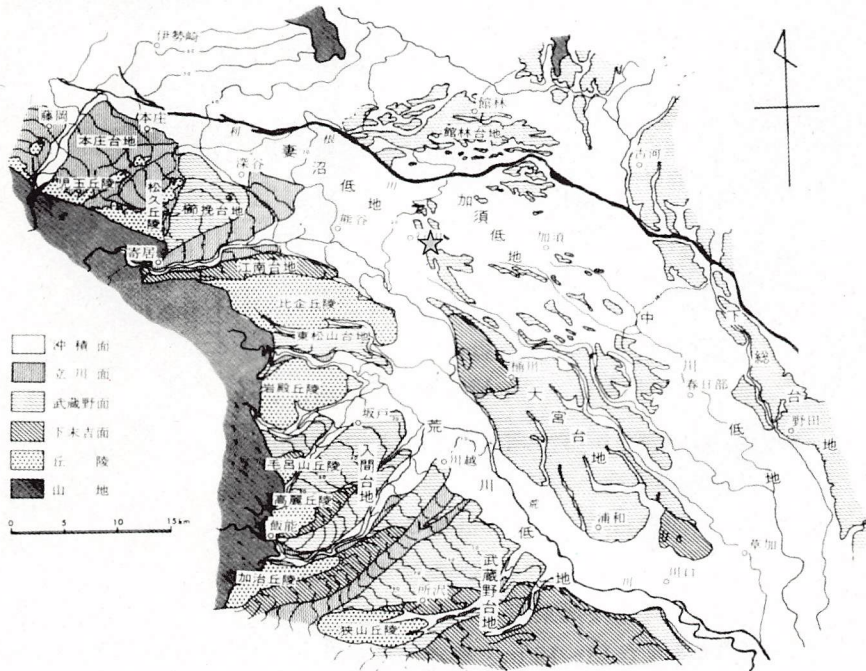
はじめに

出土鉄剣から金錯銘文の発見で一躍脚光を浴びるようになった稲荷山古墳を始め、埼玉県内最大の前方後円墳の二子山古墳など、東国の古墳時代後期にあって卓越した規模の前方後円墳が群集する埼玉古墳群の地質学的立地基盤は上層部に粘土化した火山灰土(関東ローム層)をのせる確固とした台地である。

埼玉県中央に存在する「大宮台地」(第1図)は約5万年前に始まった氷期の海退現象と荒川・利根川水系による浸食作用により、群馬県の館林台地から連なる半島状の地形を形成しており、その後2万年以降は、海進現象と埼玉県加須市付近を中心とする所謂「関東造盆地運動」が起こり、そこに利根川が流入して沖積低地が形成され、現在の独立した台地地形になったといわれる。第2図右側は加須低地の形成期(1~7世紀)の状況で、所謂「大宮台地」の北側に細長い台地が想定されている。

そして現在もそれらの台地が沈降を続けており、沖積土に覆われて標高の高い部分が大小の島状地形となって見えており、埼玉古墳群を乗せる台地も「大宮台地」北西に接して位置する島状ローム台地の一つである。このローム台地の最上層を形成するローム層は浅間火山系の「大里ローム」で、以下の深度には「立川ローム」、「武蔵野ローム」、「下末吉ローム」が堆積しているとされる(第1表)。

以上が埼玉古墳群の所在する、埼玉県北部地方の地質学・地理学的研究成果の概要であるが、古墳時代に埼玉古墳群周辺が如何なる状況だったのか、微視的な研究はなされていないようだ。



第1図 関東平野の地形区分 (☆：埼玉古墳群の位置) (堀口1975)

考古学の立場からは、遺跡の発掘調査報告書に記載される「遺跡の立地と環境」の中で、漫然と台地地形の範囲が示される場合が多いが、それらにはきちんと根拠が示されているものは少ない。

そこで、埼玉古墳群研究のうえで古墳群出現当時の景観がいかなるものであったかは、同古墳群研究の基礎的関心事の一つなので、進捗を見せた古墳群周辺遺跡調査成果から、今あらためて古墳群出現当時の景観について考えてみたい。

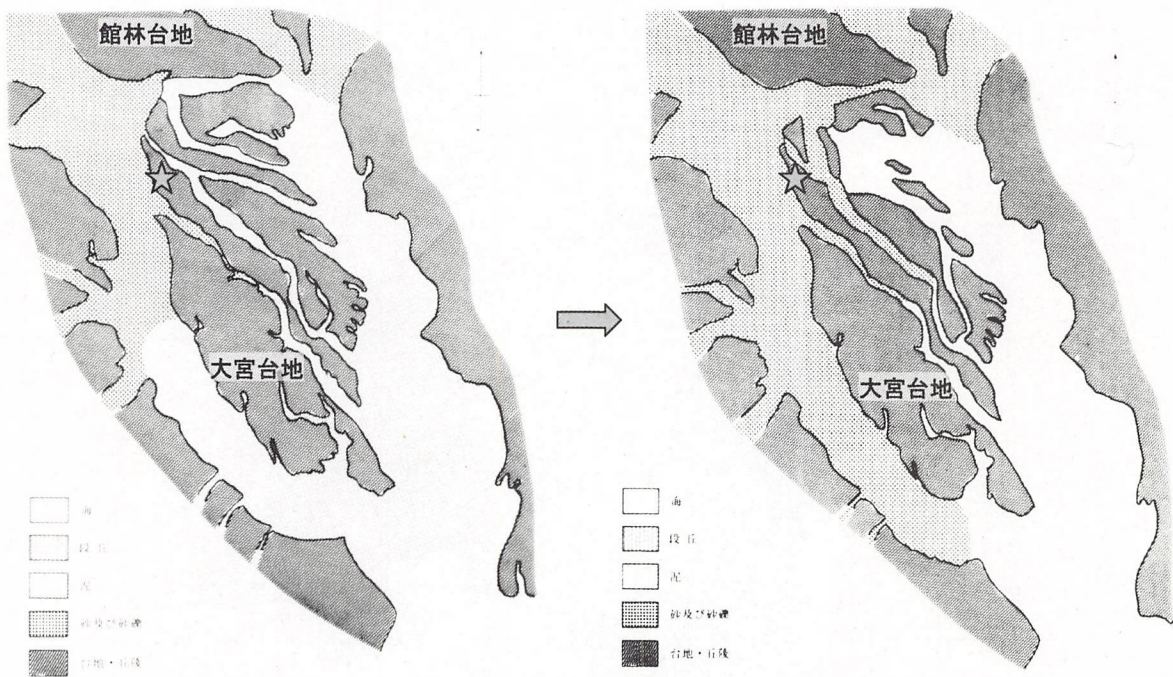
### 1 「埼玉（特々）台地」の現況

埼玉古墳群を乗せる台地の現況がわかる資料のうち、比較的詳細なのは『埼玉県表層地質図』であろう。同図は埼玉県環境防災部で作成したもので、県下の地表層の現状や断層の位置などが表示されおり、自然災害のハザードマップの下地である。

第3図に埼玉古墳群周辺の部分を示したが、所謂「大宮台地」の北側の沖積地が元荒川や古利根川とその分流である星川、忍川などの開析作用で大小の島状の台地が分布しており、埼玉古墳群を乗せる台地が大宮台地本体の北西端に一番近い大きな島状台地であることがわかる。

この台地と大宮台地を隔てるのが元荒川で、北側には星川が流れている。本論ではこの島状の台地地形を「埼玉（特々）台地」、そして周辺の小規模なものも各地区の名称を冠して「〇〇台地」と仮称して論を進めることにする。

埼玉古墳群築造当時の地理的景観が、この『表層地質図』に表現された台地地形からストレートにイメージできないのは、周辺の沖積地内に集落遺跡等が存在すること、あるいは近代の古墳削平



第2図 大宮台地の館林台地からの分離過程（☆：埼玉古墳群の位置）（堀口1993）

行為や土取り等の地形改変行為が行われており、現在のローム台地の範囲を沖積地側に多少拡張した範囲をイメージしても古墳時代当時の地形とイコールとはならない。

そこで、周辺遺跡の発掘調査の成果からそれらの地質学的立地を検討してみることにする。

## 2 古墳群周辺遺跡とその立地状況の検討

第4～6図はその表層地質図に示された埼玉台地とその付近のローム台地を国土地理院の地図に重ね合わせ、併せて周辺の代表的遺跡の分布を記載したものである。

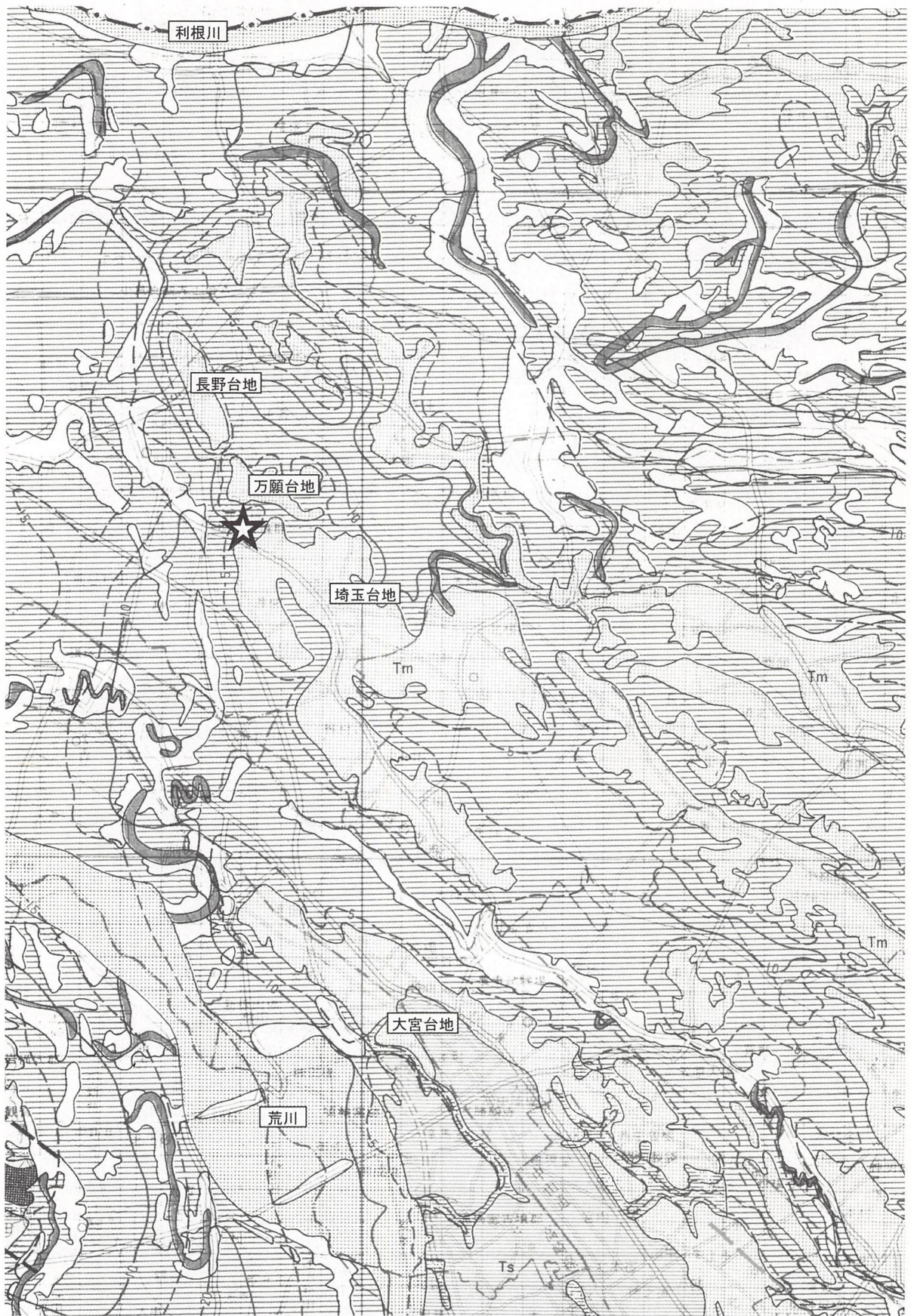
第4図は古墳時代前・中期、第5図は埼玉古墳群出現前後、そして第6図は古墳群築造停止後の奈良・平安時代の代表的遺跡の分布地図である。

第4図で埼玉古墳群として点線で範囲表示した南西端の陣場遺跡では、古墳時代前期の方形周溝墓と奈良・平安時代の住居跡の発見があった(第7図)。埼玉古墳群の載る現況の埼玉台地上に立地している遺跡で、現標高は約19mである。

第5図に位置を示した大人塚(ウヅカ)古墳は、旧埼玉(サタマ)村の史跡についての文献『史蹟埼玉』(高木1936)に登場する前方後円墳で、埴輪の出土を記述するので、6世紀台の築造の可能性が強いものである。明治20年陸軍部測量局作成の「迅速図」で位置が確認でき、利根川から荒川に導水する、現在の武蔵水路の下であることがわかる。時期は下るが隣接する第6図の野合遺跡は奈良・平安時代の集落跡で、やはり基盤にローム土が確認されていて、埼玉台地がこの付近までのびていることがわかる。そして、さらに西方の佐間地区には5世紀末頃の大日塚古墳(栗原1978)や時期は不明だが諏訪山古墳が所在していて、「佐間台地」と呼ぶべき、瘦せた尾根状の台地が所在するのであろう。

時代		地域	中川低地	加須低地	荒川低地	東京低地	大宮台地	下総台地
沖積世	中世～近世	沖積層上部	沖積層上部	沖積層上部	有楽町層上部	黒土層	黒土層	
	古代	沖積層下部	沖積層下部	沖積層下部	有楽町層下部			
	弥生							
	縄文、後・晩期							
洪積世	後期	七号地層	大里ローム層	大里ローム層	七号地層	大里ローム層	大里ローム層	
	中期		立川ローム層	立川ローム層	立川ローム層	立川ローム層	立川ローム層	
	前期		段丘礫層	段丘礫層	立川礫層	立川ローム層	立川ローム層	
			武蔵野ローム層	武蔵野ローム層	武蔵野ローム層	武蔵野ローム層	武蔵野ローム層	
			大宮層	大宮層	大宮層	大宮層	大宮層	
			東京層上部層	東京層上部層	東京層上部層	東京層上部層	東京層上部層	
中期						木下層	上岩橋層	

第1表 埼玉平野と周辺の層序表(堀口1993)



第3図 埼玉県表層地質図（埼玉県環境防災部1995）

（細かいドットが現在認識できるローム台地、白く抜けている部分は自然堤防

☆：埼玉古墳群の位置 原図はカラー）



第4図 埼玉古墳群付近の古墳時代前～中期(埼玉古墳群出現以前)の遺跡分布 □：集落 ○：古墳(墳墓) アミ掛はローム台地



第5図 埼玉古墳群付近の古墳時後期(埼玉古墳群出現以降)遺跡分布 □：集落 ○：古墳



第6図 埼玉古墳群付近の奈良・平安時代の遺跡分布 □：集落 ○：寺院跡

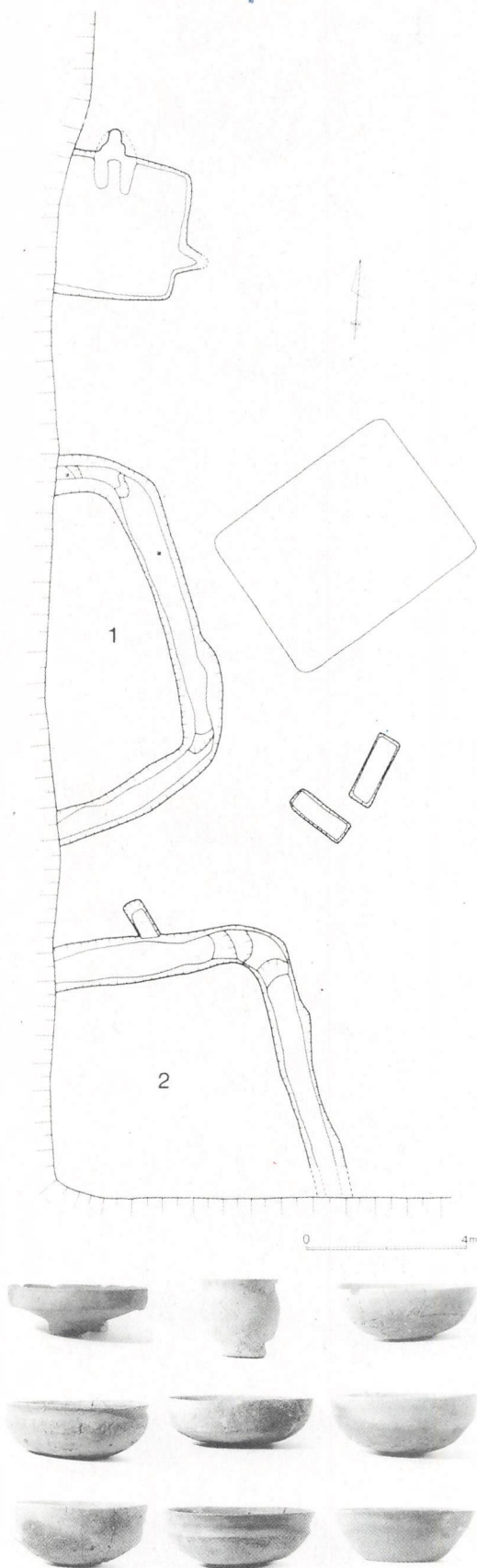
第8図は以上の埼玉古墳群西方至近の遺跡を『埼玉県遺跡地図』（埼玉県教育委員会1975）に大人塚古墳を加えて作成したものである。現在は図中の左上から下方向（北から南）に忍川が流れているが、忍川は明治～大正期の掘削であり、もともと周囲より低い地形部分に掘削されたことは見て取れるが、河川が流れていたとすればあまりにも狭隘な河川地形を想定せねばならず、これらの遺跡群の分布状況からは埼玉台地と佐間台地はもともと連続していたと理解するのが自然であろう。

第4図の長野神明遺跡は古墳群表示の北西にやや離れた万願台地北西に位置する。報文によれば、周囲水田よりもやや地盤が高く、畑となっていたといわれる。武蔵水路の掘削工事中の不時発見遺跡で古墳時代中期を主体に古墳時代後期か、もう少し新しい時期の可能性のある土器も含まれているようだ（第9図）。土器の出土状況からは当該期の集落跡の可能性が高いと考えられるもので、万願台地端部が沖積地に埋没しようとする部分に立地する遺跡であろう。現況で現標高のきちんとしたデータはないが、約18.5mと思われる。

ここで、丸墓山古墳の北側周溝を壊して流れる旧忍川の流路を検討しよう。旧忍川は現在の行田市街の北から東側を廻って南流する流れと市街の南を東に向かう流れが埼玉古墳群の西で合流して東に流れており、現在の地形図でその様子が確認できる。

長野台地から万願台地にかけての西方は古墳時代前後には浅い窪地状に北に向い開析が進み、加えて地盤の沈降で入江状となったところに、旧忍川の流れが流入し、前述のようにその南側が、埼玉、佐間両台地が連続しており、流れ下る場所として一番低かった丸墓山古墳の北側周溝と稲荷山古墳外堀北西角を壊して東流する状況が出現したと考えられるのだが、その具体的な時期は文献記録にも見えず、現在のところ不明である。今後の研究課題としておきたい。

埼玉古墳群南西にひろがる沖積地内の遺跡の立地



第7図 陣場遺跡の遺構配置と出土土器  
(栗原1969)



状況はどうだろうか。国道17号の新設工事で鴻池、武良内、高畑の3遺跡が調査されている。

忍川の東側の鴻池遺跡では古墳前期の方形周溝墓や中～後期の住居跡が検出されている(第9図)。これらの方形周溝墓は近年の低地所在遺跡の研究からすると、実は方形周溝墓ではなく住居の周溝の可能性が指摘されている。日常生活の使用後に破損、廃棄されたと考えたほうがよい台付甕などの器種が目立つことから、その可能性が強いと言わざるを得ないが、検討は別稿で行いたい。

武良内遺跡でも古墳時代前期の方形周溝墓や中期の住居跡、古墳後期の円墳跡が検出されていて、方形周溝墓は同じく住居の周溝の可能性もある。

鴻池・武良内両遺跡は同じ微高地内の東端と西端に位置する同一の遺跡の可能性があり、基盤についても黒色変化したロームと報告されている。

高畑遺跡でも方形周溝墓や古墳時代後期の住居跡が検出されている。方形周溝墓とされる遺構は溝の一部が検出されているものだが、周溝墓と考えるには規模が大きすぎるので、館遺構等の堀跡の可能性を考えたほうがよさそうだ(第10図)。基盤土は同じく黒色変化したロームと報告されている。

これらの遺跡の調査から、付近は古墳時代前期から後期にかけて継続する埼玉古墳群至近の集落としては大規模な拠点集落の可能性を示唆するものである。埼玉古墳群を出現させた人々の中核的集団の人たちが形成した集落の一つであることに間違いない。

さて、これらの遺跡の現標高は、鴻池・武良内両遺跡で約18m強、高畑遺跡では約19m弱で、調査報告書は遺跡が沖積地上にあり黒色に変化したローム層の存在を記述する。報告書の写真から遺構検出面までは数10cmである。沖積土に覆われて現在では殆ど台地地形と認識不可能だが、河川に開析されたローム台地が遺跡の基盤として存在するのは確実であろう。



第8図 埼玉県遺跡地図に見る埼玉古墳群西方の古墳と集落跡(埼玉県教育委員会1975に加筆)

A 大人(ウ)塚古墳 B 諏訪山古墳 C 大日塚古墳 93陣場遺跡 94・95野合遺跡

現在の忍川は明治～大正期に新規に開削されたものだが、その南の部分はかつての流路筋に開削されたことは東南～南北方向にのびる田圃となって現在でも小規模水路が流れる沖積地の状況から明らかである。古墳時代にどの程度の規模の河川だったのか、はっきりしないが、現在の行田市街西北方面から埼玉台地南西方に向かって流れ、埼玉台地が流路の障害となって南に方向を変え、現在の元荒川に合流する幾筋かの流れがあったものと思われ、これを「古忍川」と呼んでおこう。

上記遺跡群は古墳時代当時、その流路筋の島状微高ローム台地上の選地で、人々の居住環境あるいは外敵からの防御環境はまことに、申し分のない理想的なものだったと想像される。

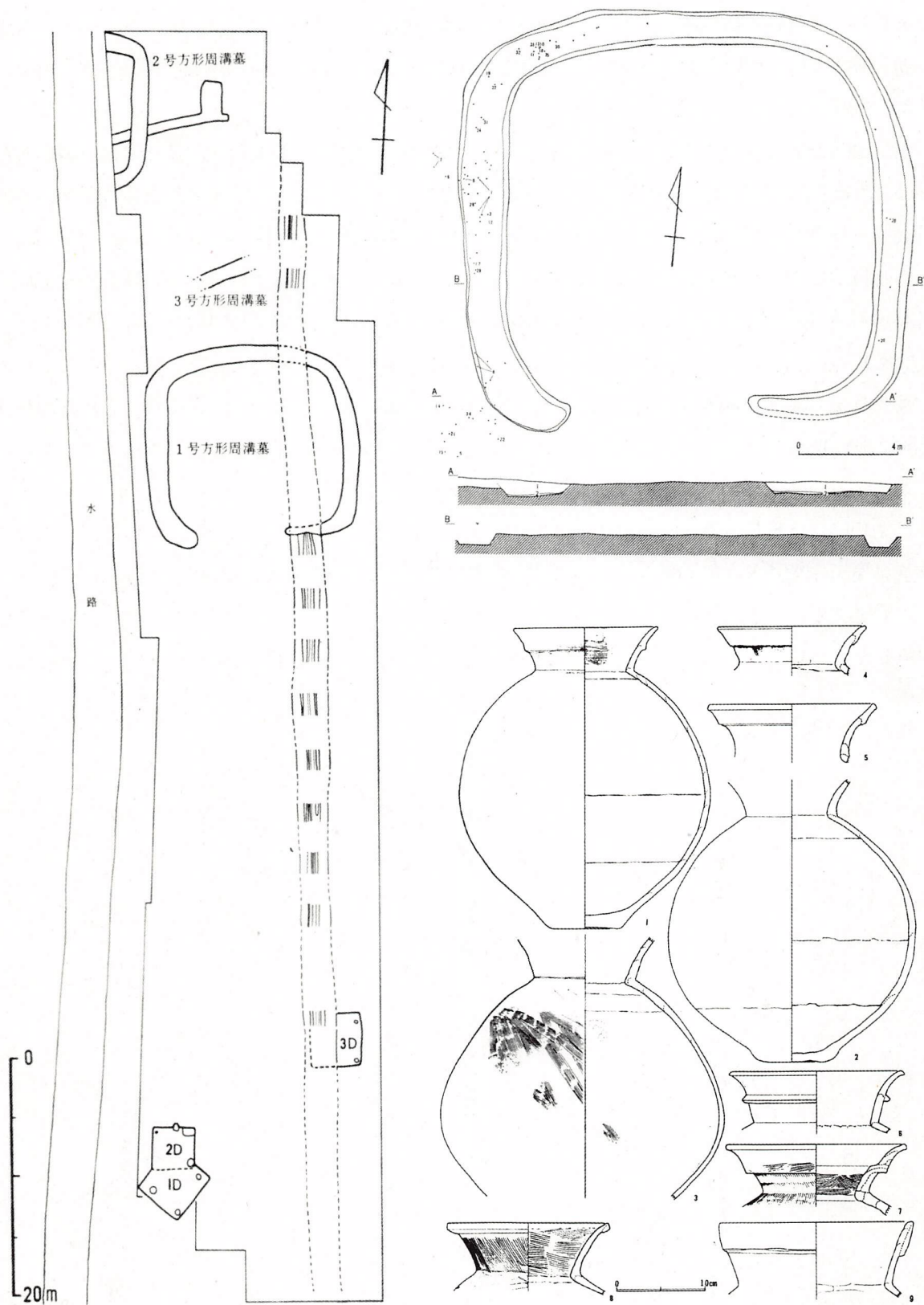
次に埼玉台地北東に広がる沖積地内の小針、小針北、愛宕通、3箇所の遺跡の状況を見てみよう。

小針遺跡周辺は現在、一面の水田となっている。これまでに3次の発掘調査が行われ、古墳時代前期から奈良・平安時代までの竪穴住居跡が56軒検出され、継続的に形成された集落遺跡で（第12図）、基盤層はローム層と確認されている。（中島利治1978、齊藤国夫1980ほか）行田市の都市全図（第19図）から読みとれる小針遺跡付近の現標高は15.0～15.3mで、発掘調査報告書中に遺構のきちんとした標高の記載がないが、写真等で見える限り、遺構検出面までの深さはせいぜい数10cmである。

平安時代より新しい遺構が発見されていないことは、沖積化の進行とともに、遺跡付近まで水位が上がり、これ以降にそう遅くない時期に集落が廃絶したことを示すものだろう。「造盆地運動」による沈降速度は埼玉台地付近では年間1mmと計算されていて、平安時代以降でも1m以上沈降している計算である（第13図）。現在の水位面と古墳時代当時の水位面とを等しく考えることはできないものと思うが、当時の水位環境を考える参考にはなる。



第9図 長野神明遺跡出土土器（塩野1969）



第10図 鴻池遺跡の遺構配置と「周溝墓」・「周溝墓」出土土器 (金子1977)

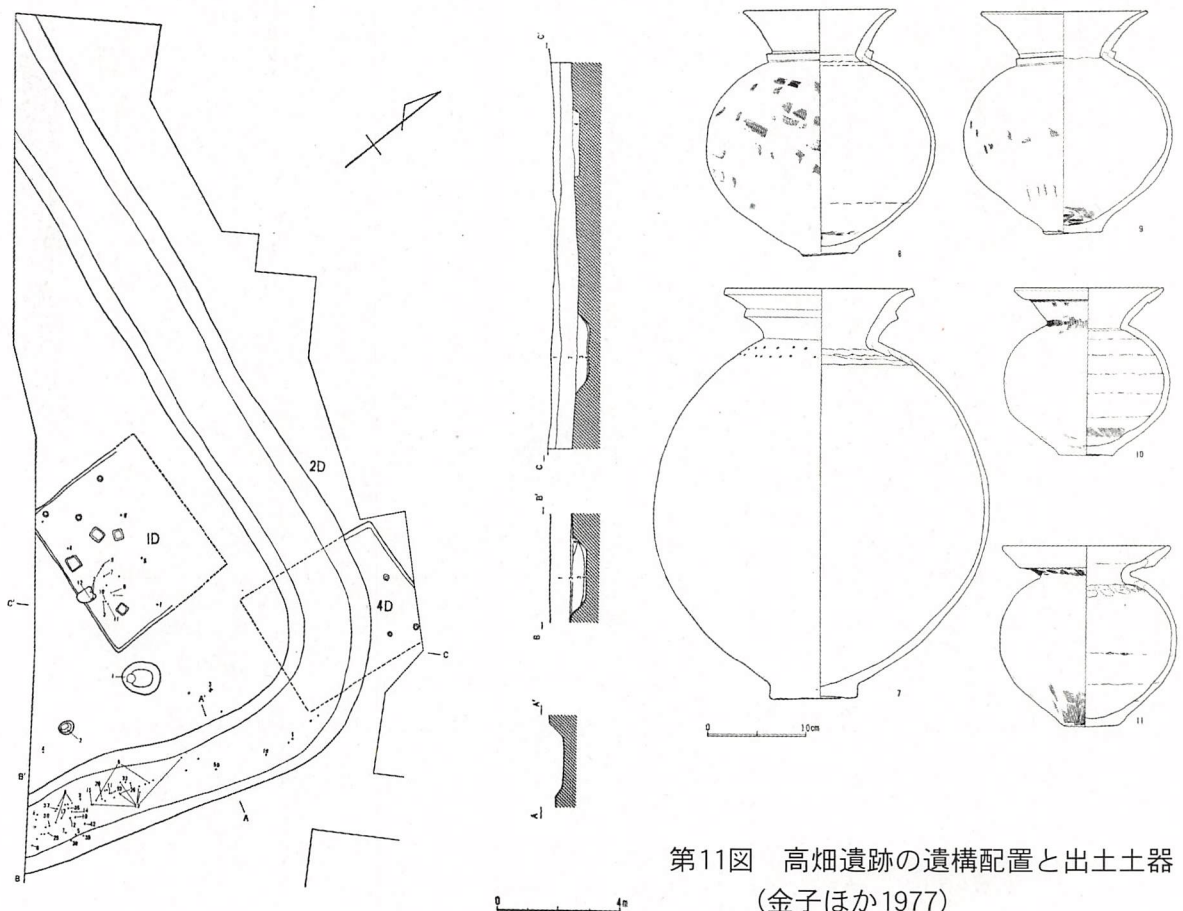
小針北遺跡は前述の小針遺跡と星川を挟み、北側に所在する遺跡で、送電鉄塔建て替えに伴う地点的な調査しか行われていないが、古墳時代中期の住居跡の一部が検出されていて、土器類が出土している。小針遺跡同様やはり水田下から発見された遺跡で、基盤土は黄褐色ロームと報告されている（第14図）。報告書によれば小針北遺跡の現標高は16.3～16.4mで、現表土からローム層上面までは約1.2mほどである。

愛宕通遺跡は旧忍川を挟み、小針遺跡の西方に所在する遺跡で、県道の改良工事に伴う道路敷の限られた範囲の調査ではあったが、広義の埼玉古墳群に含まれる若王子古墳群を構成する古墳時代後期の円墳跡が発見されたほか、奈良・平安時代の集落も確認されている（第15図）。周辺はやはり水田が広がり、沖積地化しているが、基盤土としてロームが確認されている。愛宕通遺跡の古墳検出部分は調査区北の沖積地に近い低い箇所では標高は約16m、周溝底の標高は14.9～15.1mを測る。

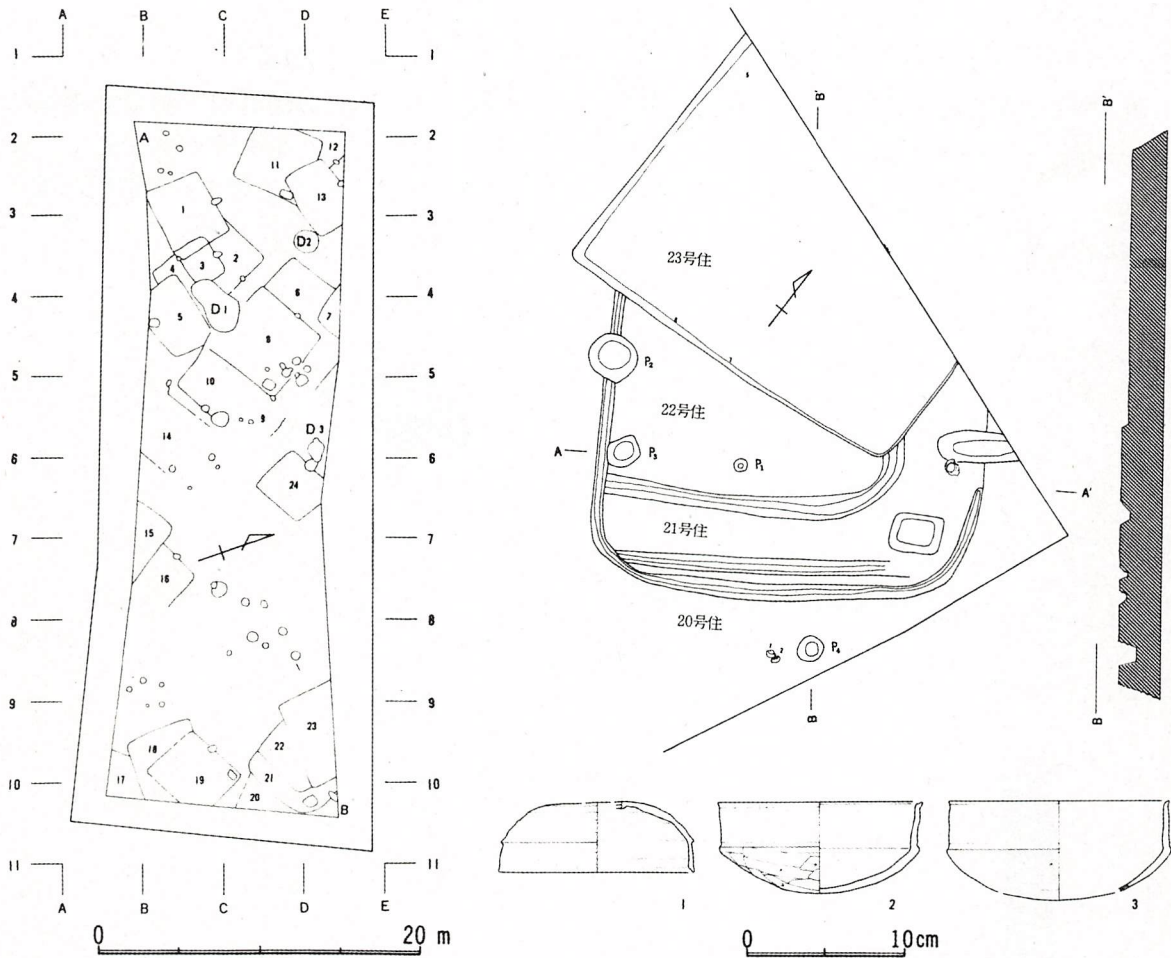
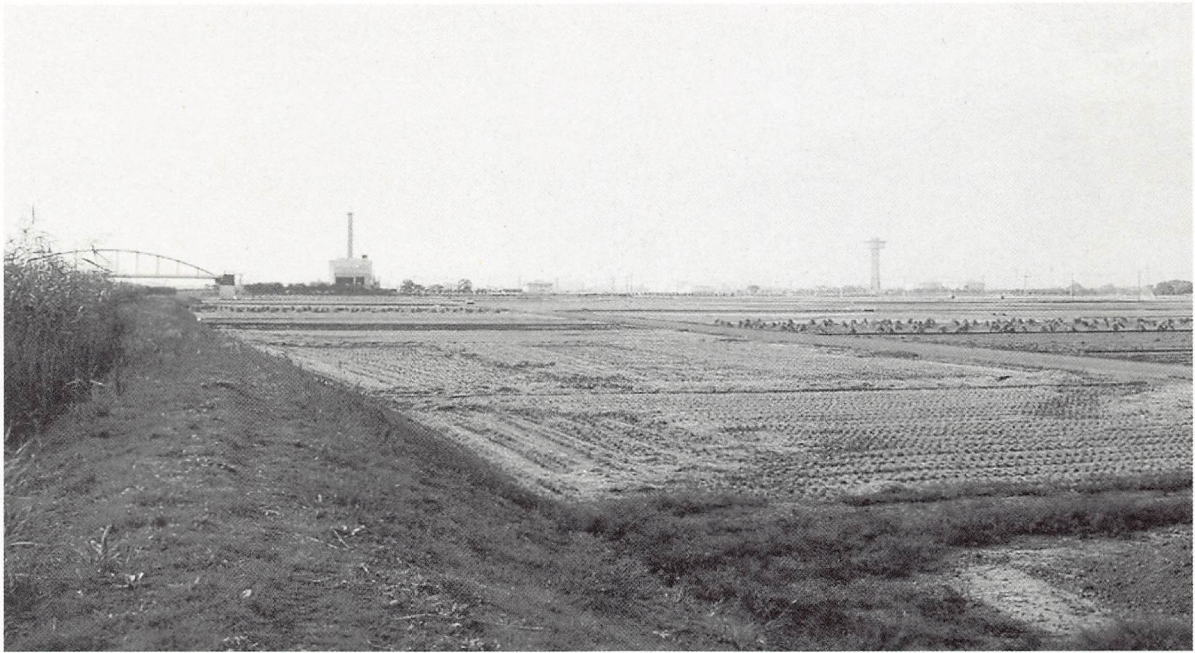
小針、愛宕通両遺跡は埼玉台地北東沿部に位置する遺跡と考えられ、小針北遺跡は星川対岸の下須戸台地と関連するものと考えてよさそうだ。

### 3 古墳時代の埼玉台地と周辺の標高について

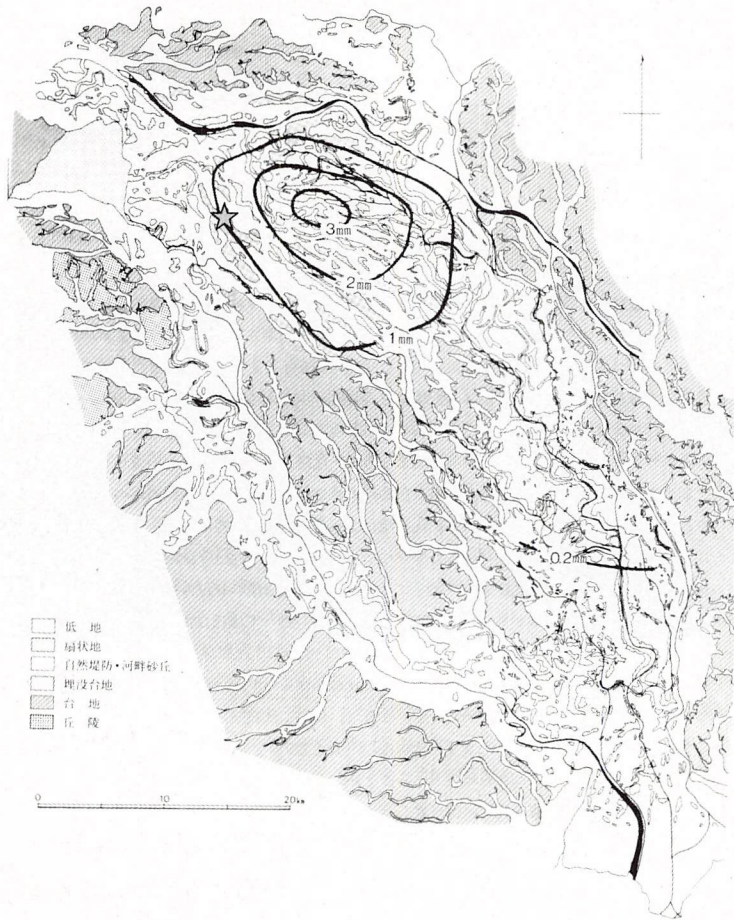
次に埼玉古墳群各古墳の調査等から、埼玉台地の古墳時代当時の標高を考えてみる。



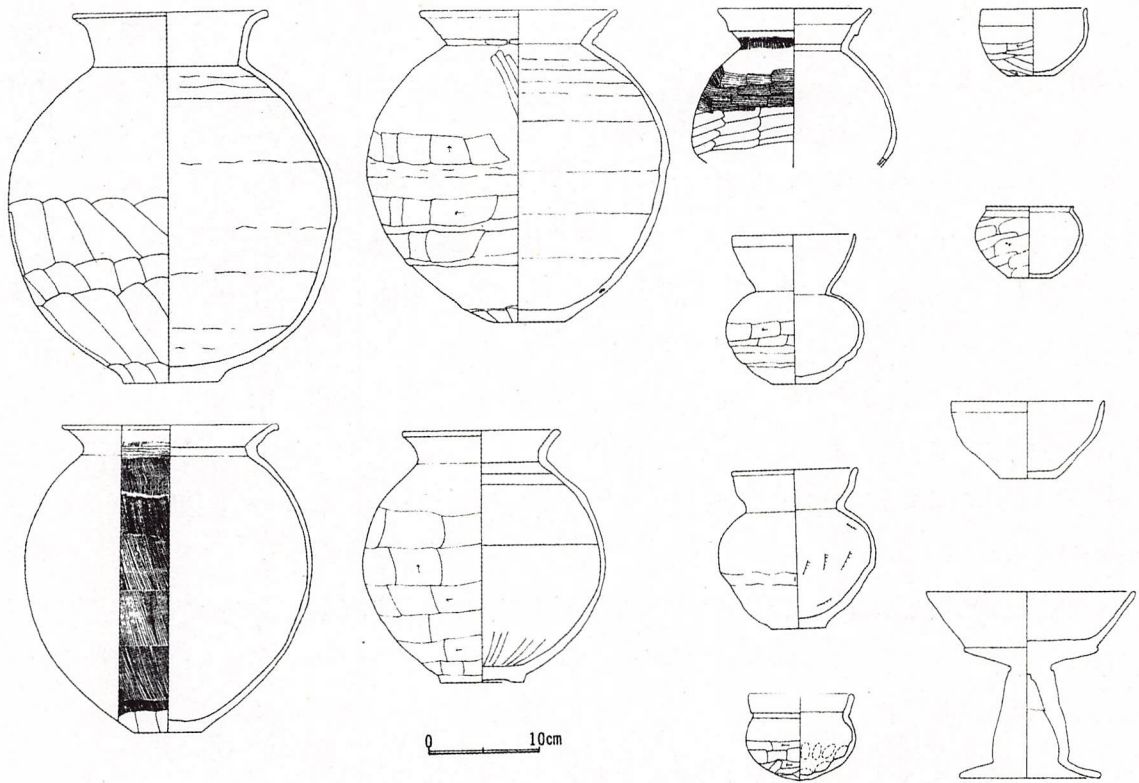
第11図 高畑遺跡の遺構配置と出土土器  
(金子ほか1977)



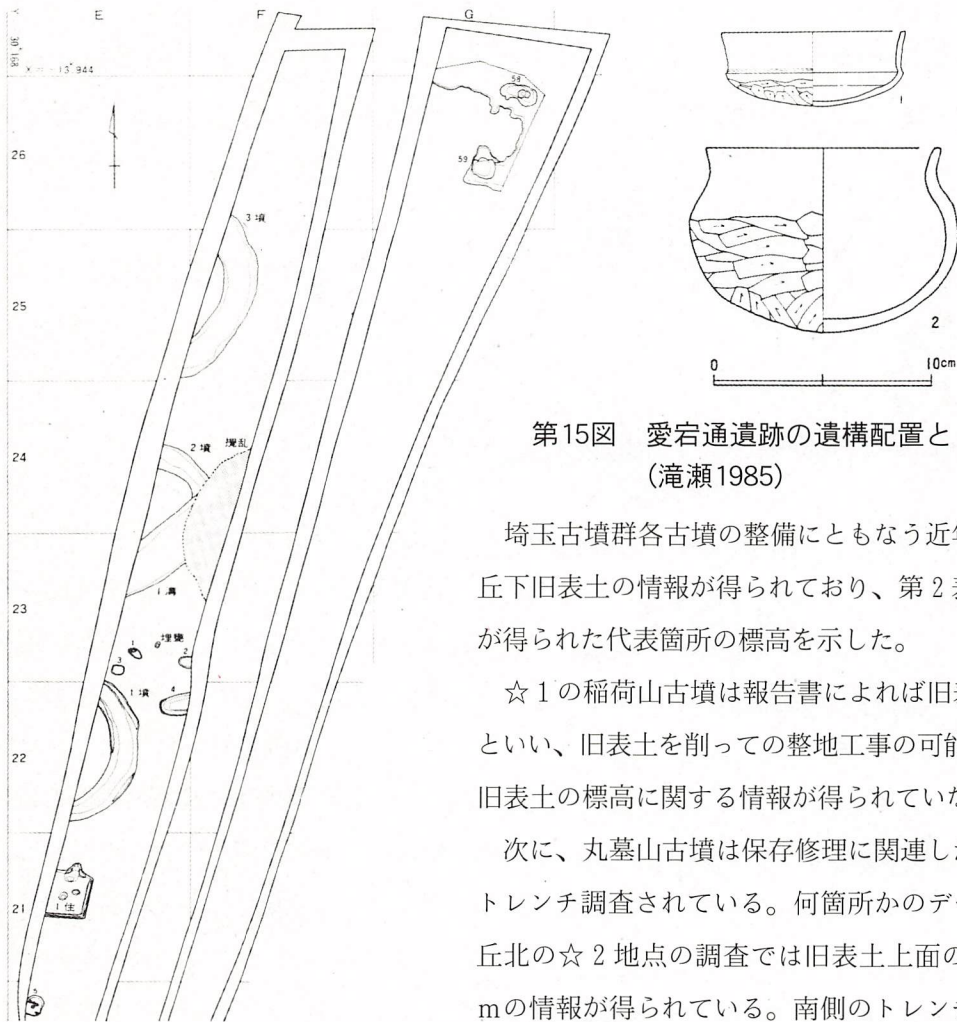
第12図 上：小針遺跡の現況(2003年10月撮影、中央左手の煙突付近が遺跡。左は旧忍川の土手)  
 下：小針遺跡第2次調査の遺構配置と出土土器(齊藤1980)



第13図  
加須低地の造盆地運動による年間沈降速度  
(☆：埼玉古墳群の位置)  
(堀口1993)



第14図 小針北遺跡出土土器 (齊藤1980)



第15図 愛宕通遺跡の遺構配置と1号墳出土土器  
(滝瀬1985)

埼玉古墳群各古墳の整備にともなう近年の発掘調査で墳丘下旧表土の情報が得られており、第2表に旧表土の情報が得られた代表箇所の高さを示した。

☆1の稲荷山古墳は報告書によれば旧表土が存在しないとい、旧表土を削っての整地工事の可能性を考えていて、旧表土の高さに関する情報が得られていない。

次に、丸墓山古墳は保存修理に関連した調査で墳丘裾がトレンチ調査されている。何箇所かのデータがあるうち墳丘北の☆2地点の調査では旧表土上面の高さ約18.3mの情報が得られている。南側のトレンチ調査の☆3でも約18.3mと同様の数値が得られている。(第16図)

將軍山古墳でも墳丘の保存修理に伴い墳丘略全面の調査がされており、後円部西側の☆4の地点で約18.2mというデータが得られている。(第17図)

愛宕山古墳は後円部北東側と前方部南東側で周溝の確認調査の際に後円部東墳丘裾部分☆5の地点が調査されており、報告書から読みとれる旧表土高さは17.5mである。

瓦塚古墳でも墳丘保存修理に際して数回にわたる発掘調査が行われており、後円部南☆6の地点で18.5mのデータが得られている。

鉄砲山古墳は周溝の確認調査が2回ほど行われているが、後円部東側の調査の際、☆7の墳裾部分が調査されていて、約18.3mのデータが得られている。(第18図) 中の山古墳も後円部北から西側の周溝の範囲確認調査がされている。くびれ部付近のトレンチで、旧表土上面高さ約18.6mのデータが得られている。

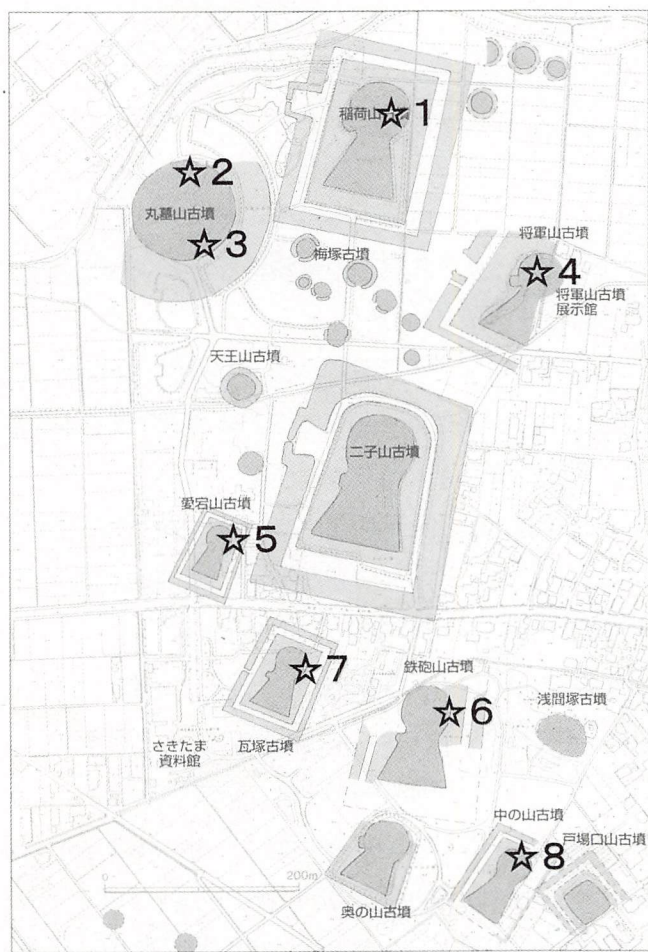
以上、各古墳の発掘調査から得られた情報をまとめてみると、比較的北に位置する古墳下の旧表土では約18.2～18.3mの範囲にある。(愛宕山古墳の数値は信頼に足りない。) 南に位置する各古墳では鉄砲山古墳が18.3mののだが墳丘内の安定面までトレンチが設定されていないことを考慮すると瓦塚古墳や中の山古墳から得られた18.5～18.6mが有効な数値と言えよう。結論としては埼玉古墳群の築造当時の高さは北でやや低く18.2～18.3mで南に向かってやや

標高を増し、18.5～6mの微傾斜地形であったと推定される。

次に埼玉台地と周辺沖積地の標高について、第19図で検討しておきたい。これは行田市発行都市計画図をもとにした『行田市全図』から作成したもので、構造物のない田あるいは畑等で標高の

記入のある部分を選択してその数字を示した。

これによれば、古墳群中では17.5あるいは18.0mといった数値で、台地中央に近づく東南方では18.2あるいは17.9mでそれほど極端な標高差がないことがわかる。一方、埼玉台地北東側の沖積地はその中央付近に現在は県の行田浄水場ができていますが、もと「小針沼」(万葉集に登場する「尾崎沼」もこの付近と考えられる。)があり、星川の流路筋に当たる。台地のやや低い部分は耕地整理が行われて田圃になる部分も多いが、標高を拾うと緩傾斜で北東に向かい標高を減じているのがわかり、台地が緩傾斜面を形成して、その上に沖積地が形成されている状況が考えられる。



埼玉古墳群

場所	古墳名	調査年度一箇所	旧表土標高	文献
☆1	稲荷山	S42-2T	旧表土なし →削平して盛土?	小川ほか 1980
☆2	丸墓山	S60-1T	18.3	若松 1988
☆3	〃	S61-AT	18.2	田中 1989
☆4	将軍山	H4-B・B'	18.0	岡本 1997
☆5	愛宕山	S56- 後円部東側調査区	(17.5)	杉崎 1985
☆6	瓦塚	S61-3T	18.5	若松 1989
☆7	鉄砲山	S58-A・A'	18.3	杉崎 1985
☆8	中の山	S62-2T	18.6	若松 1989

第2表 埼玉古墳群各古墳で検出された旧表土上面の標高(各場所は上図に対応)



次に古墳群西方、現在の忍川と武蔵水路が一番近づく付近では標高17.0～17.3m前後の部分が多く、東方の小針遺跡付近よりは2m近く高い。このことは前節で触れたように、古墳時代当時に埼玉台地と佐間台地の連続性を裏付ける。弱い窪み地形を挟んでいた可能性があるが、尾根状の佐間台地が埼玉台地に連なっていた状況を示すものと理解してよいだろう。

#### 4 埼玉古墳群付近の「埼玉台地」の復原

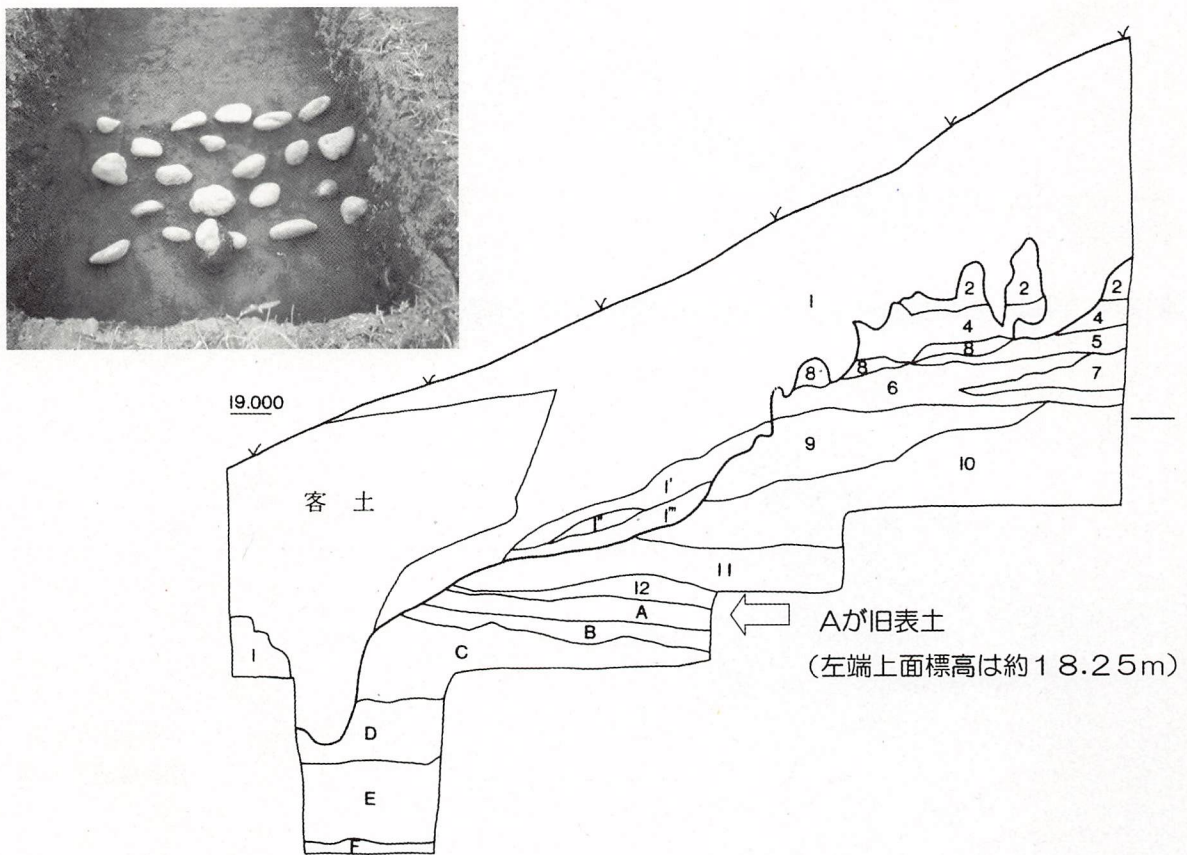
前節までに埼玉古墳群と周辺の地理的環境を検討してきた。改めて整理すると、

①埼玉台地は西側の佐間台地と北側の万願台地・長野台地とそれぞれ連続していたと思われ、連続する3つの台地間は開析する入江状の低地となっていた。

②古墳群墳丘下に残る築造当時の旧表土上面の標高は18.2～18.6mで、埼玉台地中央に向かい、緩傾斜となっており、

③古墳群東方の古墳群出現当時の大集落、小針遺跡の標高は15.0～15.3mで古墳群に向かい緩傾斜地形であった。

④小針遺跡の標高から、当時の埼玉古墳群立地面と沖積面は少なくとも3m程度の比高差があっ

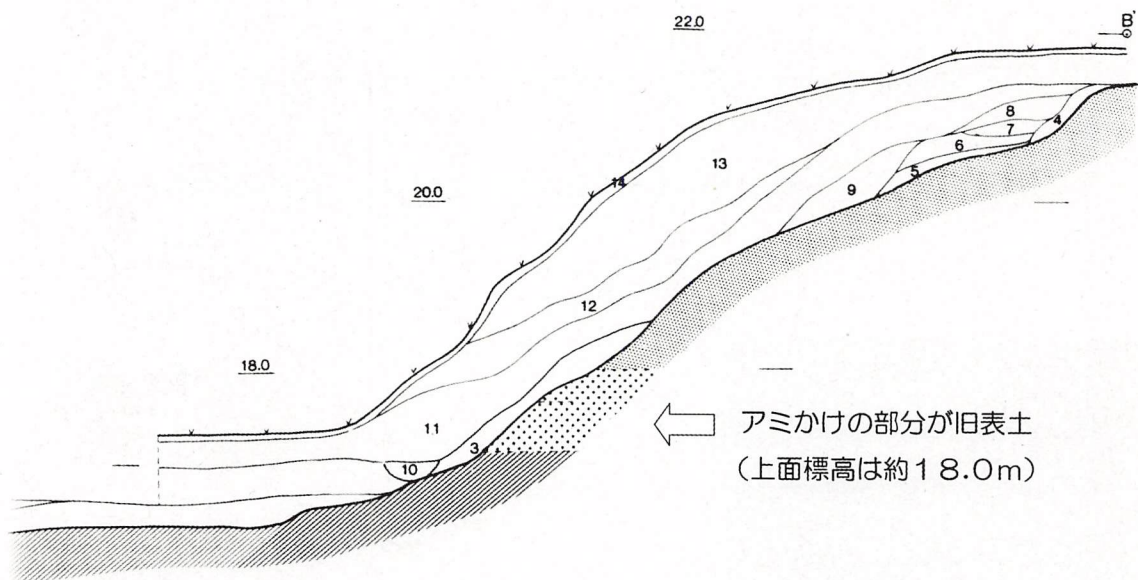


第16図 丸墓山古墳南墳裾保存修理の際の確認調査Aトレンチ内の旧表土と墳丘裾のC2トレンチ内での貼石の検出状況(左上写真) (田中1989)

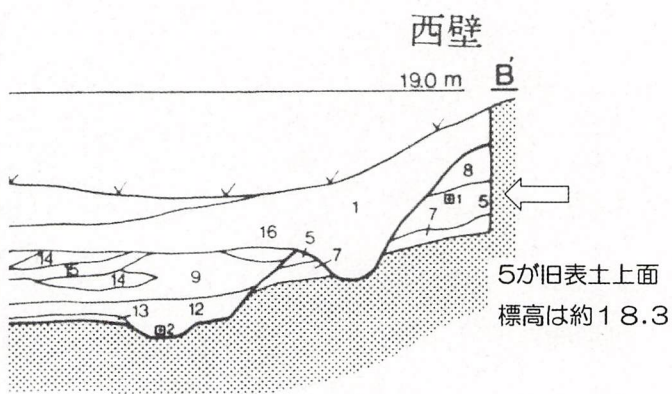
た。

⑤古墳群南西の沖積地内には古忍川が南東方向に流れ、細長い島状の下忍台地・樋上台地上には古墳時代前期から継続する拠点集落が存在していた。

以上から、古墳群とその周辺の平面的な地理的復元を試みたのが第20図である。さらに第21図では、稲荷山古墳北東からの地上景観を、二子山、丸墓山両古墳出現後間もない頃を想定して復原してみた。将来旧忍川が形成される弱い浸食地形を右手に想定し、稲荷山古墳とその左後方には埼玉古墳群で現在のところ唯一葺石（まばらな状況から「貼石」と呼ぶべきだろう。）を有する丸墓山古墳が見え、さらに左奥には二子山古墳が見える状況を再現した。



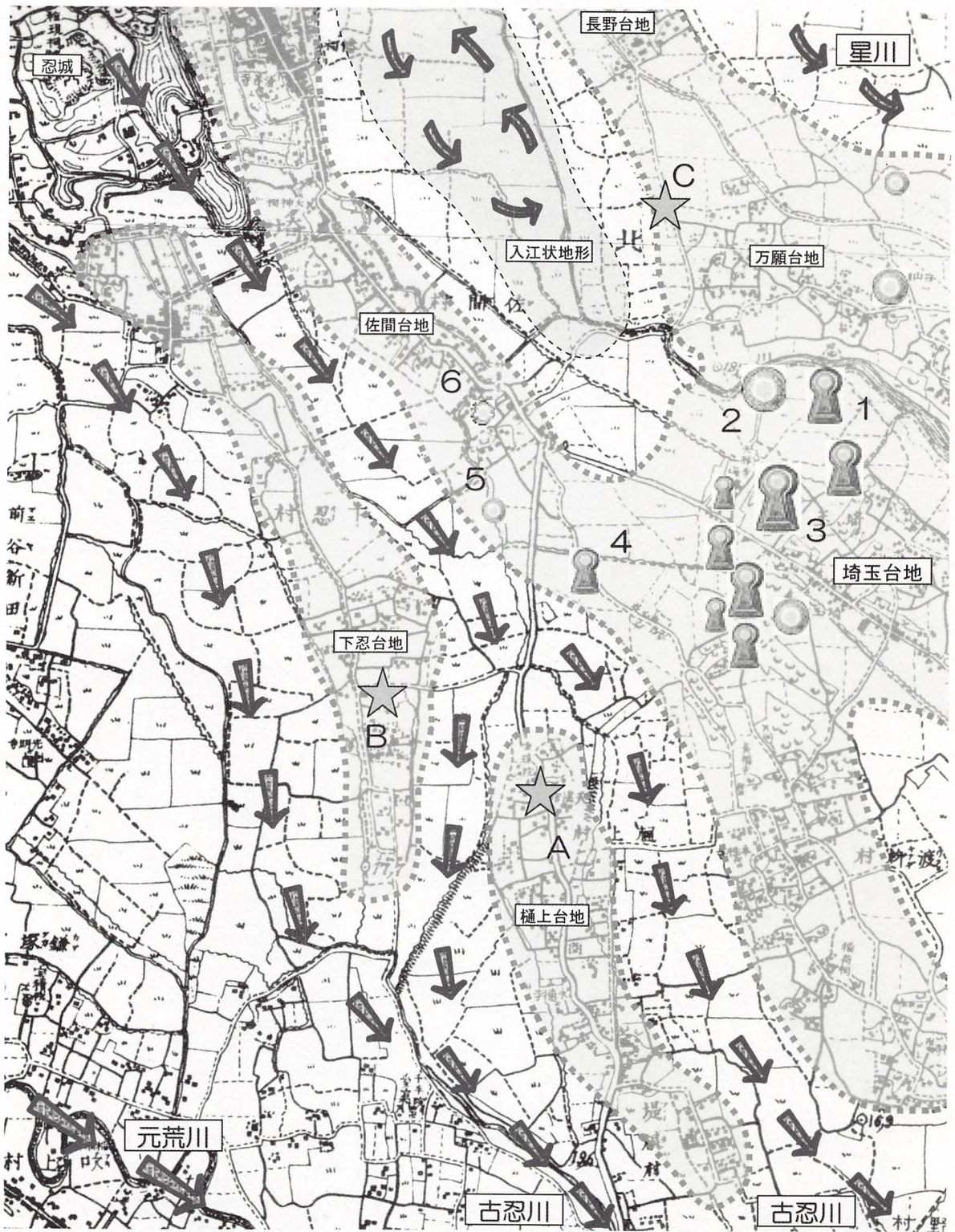
第17図 将軍山古墳史跡等活用特別事業の際の後円部西側調査区内の旧表土（岡本1997）



第18図 鉄砲山古墳後円部東側周溝確認調査時の墳裾トレンチ内の旧表土（杉崎1985）



第19図 行田市全図に見る埼玉古墳群周辺の標高 (カッコ内は遺構の確認面、もしくは旧表土の標高)



第20図 古墳群周辺の遺跡分布から推定される埼玉古墳群出現当時の台地と河川地形

- 1 稲荷山古墳 2 丸墓山古墳 3 二子山古墳 4 大人(ウ)塚古墳 5 諏訪山古墳 6 大日塚古墳  
 A 鴻池・武良内遺跡 B 高畑遺跡 C 長野神明遺跡

## おわりに

今回の検討作業では、旧忍川が現在の流路になった時期を明らかにできていないし、古忍川の実体についても論及できていない。埼玉古墳群のより詳細な景観復元の鍵はそれぞれの流路の変遷過程や具体的な時期の解明であることを改めて認識した。そのためには現在の地質図や地図を用いた検討では精度的にも困難で、地質学的現場調査の成果を得てさらに検討していく必要がある。

ともあれ、埼玉古墳群築造時期の地理学的なイメージを考古学的調査の裏付けをもって、不十分ながらも提示できたものと思うが、専門外部分の調べが不十分のまま文章化し、犯した誤りも少なからずあると思う。本稿が、試論的レベルのものであることをおことわりしつつ、地理学的研究分野からの御意見・批判・教示を期待して記述を終えることにする。

埼玉台地上の埼玉古墳群が築造された付近は、これまでの発掘調査では古墳時代の住居跡が殆ど検出されていない。これは一帯が古墳群出現以前は居住域としては利用されていなかったこと、そして古墳群出現の嚆矢である稲荷山古墳の築造時から古墳時代を通じて墓域として確保されたことを示すものだろう。人々が古墳の存在を認識しつつも古墳群に近接して村落を構え始めたのは奈良時代になってのことであったのは、同時期の竪穴住居跡の発見例が証明する。(第6図)

人々が古墳に対する畏敬の念を薄めつつ、古墳群周辺の土地利用に乗り出すまでにあまり長い時間かかっていないのは、周辺低地の沖積化が進行したことも原因となっているのではなかろうか。古墳群築造終了以降の景観復原も今後の資料の増加を待って検討してみたい。



第21図 埼玉古墳群北部大型古墳の東方からの景観 (原図はカラー)

参考文献

- |            |      |  |               |
|------------|------|--|---------------|
| 岡本健一       | 1997 | 「Ⅱ墳丘及び周溝の調査」『將軍山古墳（史跡埼玉古墳群整備事業報告書・確認調査編）』p 13・14 | 埼玉県教育委員会      |
| 小川良祐ほか     | 1980 | 『埼玉稲荷山古墳』  | 埼玉県教育委員会      |
| 金子真土ほか     | 1977 | 『国道17号熊谷バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』                        | 埼玉県教育委員会      |
| 栗原文蔵       | 1969 | 「行田市陣場遺跡」『埼玉考古 7』                                | 埼玉考古学会        |
| 栗原文蔵       | 1978 | 『大日種子板石塔婆および古墳の調査』                               | 行田市教育委員会      |
| 斉藤国夫       | 1981 | 『小針遺跡』   | 行田市遺跡調査会      |
| 斉藤国夫       | 不明   | 『小針遺跡第3次調査報告書』                                   | 行田市遺跡調査会      |
| 斉藤国夫       | 1980 | 『小針遺跡発掘調査報告書 B地区』                                | 行田市教育委員会      |
| 斉藤国夫       | 1979 | 『野合遺跡・原第Ⅱ遺跡発掘調査報告書』                              | 行田市教育委員会      |
| 埼玉県環境防災部   | 1995 | 『埼玉県表層地質図』                                       | 埼玉県県政情報センター   |
| 塩野博        | 1969 | 「埼玉県行田市長野神明遺跡について」『考古学雑誌55-4』                    | 日本考古学会        |
| 杉崎茂樹       | 1985 | 『愛宕山古墳』（埼玉古墳群調査報告書3集）                            | 埼玉県教育委員会      |
| 杉崎茂樹       | 1985 | 『鉄砲山古墳』（埼玉古墳群調査報告書2集）                            | 埼玉県教育委員会      |
| 杉崎茂樹       | 1987 | 『二子山古墳』（埼玉古墳群調査報告書5集）                            | 埼玉県教育委員会      |
| 杉崎茂樹       | 1988 | 『丸墓山古墳・埼玉1～7号墳』（埼玉古墳群調査報告書6集）                    | 埼玉県教育委員会      |
| 高木豊三郎      | 1936 | 『史蹟埼玉』   | 埼玉村教育會        |
| 瀧瀬芳之       | 1985 | 『愛宕通遺跡』  | 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 |
| 田中正夫       | 1989 | 「丸墓山古墳保存修理事業の報告」『調査研究報告第2号』                      | 県立さきたま資料館     |
| 中島利治       | 1978 | 『小針遺跡の調査 A地区』                                    | 行田市教育委員会      |
| 中島利治ほか     | 1989 | 「埼玉古墳群周辺遺跡の検討(I)」『調査研究報告第2号』                     | 県立さきたま資料館     |
| 堀口萬吉       | 1993 | 「中川水系の地形と地質」『中川水系Ⅰ総論・自然』                         | 埼玉県           |
| 堀口萬吉       | 1975 | 『埼玉の地質をめぐって』                                     | 築地書館          |
| 若松良一       | 1989 | 『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』（埼玉古墳群調査報告書7集）                 | 埼玉県教育委員会      |
| 若松良一       | 1986 | 『瓦塚古墳』（埼玉古墳群調査報告書4集）                             | 埼玉県教育委員会      |
| 若松良一       | 1992 | 『二子山古墳・瓦塚古墳』（埼玉古墳群調査報告書8集）                       | 埼玉県教育委員会      |
| 矢部長克・青木廉次郎 | 1927 | 「関東構造盆地周縁山地に沿へる段丘の地質時代」『地理学評論3』                  |               |